「オプス・デイの重 みと神様の力」

ハビエル・エチェバリーア神 父は、1994年4月20日に属人 区長(プレラートゥス)に選 ばれました。それに伴って 数々のインタビューを受けま したが、ここに、1994年に行 われた「エポカ誌」のピラー ル・ウルバノとの最初の対談 を紹介します。ピラール女史 は、印象を次のように語って います。エチェバリーア神父 は、表情をほとんど変えずに 話す。動作や身ぶりにも地味 である。その性格や率先力、 力や熱情を内に秘めている。

会談中、ずっと両手は静かに 置かれたままだったが、知的 で鋭く見通すようで生き生き とした視線、それが全てを物 語っていた。全文は、右の選 択をクリックしてください。

2004/04/22

- 神父様についてはほとんど何も知りません。どこで、どのような家庭にお生まれになったのですか?
- 1932年6月14日、マドリッドのフォルトゥニー通りで生まれました。父はマドリッド大学工学部の教授をしていました。兄弟の中で誰も工学部に進んだ者がいなかったので、父は、私がその道へ進んでくれたらと考えていたようです。私が工学部に入る準備をするために、一冊の本を書いたぐらいです。しかしな

がら私は文系の方が好きでした。父は私が数学を勉強するのを手伝ってくれました。そして、どんな問題であっても、いつも三つか四つの解決法を示してくれましたが、そのことが私に数学に対する嫌悪感を持たせました。それで、法学部を選んだのです。

- 弁護士を目指しておられたのです か?
- いいえ。私は、祖父のように株の 売買をしたかったのです。金を稼い で、良い暮らしをしようと考えてい ました。その後、神様が私の人生に 入ってこられ、計画を変更しまし た。ここローマのアンジェリクム大 学で教会法修士課程、ラテラノ大学 で法律の博士課程を終えました。
- どのようにオプス・デイを知られたのですか?

- 私の友人の一人が1948年の6月6日、日曜日に電話をしてきて、

「ディエゴ・テ・レオン通りのオプ ス・デイの寮まで、オプス・デイと は一体何なのかを探りに行かない か?」と提案しました。そして、映画 を見に行く予定を変更して、我々6 人で行ったわけです。非常に暖かく 迎えてくれました。六人のグループ ではなく、各自に一人のメンバーが 付いてくれ、知りたいことをなんで も尋ねることができました。そこか ら出るとき、私のポケットには、当 時列福調査が始まったばかりのイシ ドロ・ソルサノの出来たての祈りの カードが入っていました。イシドロ は、オプス・デイのメンバーでエン ジニアでした。そして、まねること が可能で魅力的な「信徒の聖人」に 思えました。 (…) そして、1948年 の9月8日にオプス・デイに入る許可 を願い出ました。十六歳の時でし た。

- 何があなたを引きつけたのでしょうか?
- オプス・デイ創立者との出会い は?
- パドレは1946年からローマに住んでおられましたが、度々スペインに来られました。1948年の11月、スペインに来られたとき、「ディエゴ・デ・レオン」での団欒に呼ばれました。オプス・デイにおけるパドレとの親子関係は、召し出しの根本をな

す特徴です。誰に言い含められたのでもなく、私はパドレを知りたいと熱望していました。その団欒には35人ほどがいたのですが、パドレは手紙を書いたばかりの私たち三人を呼んで、その日の午後にセゴビアにある黙想会の家『モリノビエホ』まで行かないか、と誘って下さいました。

古い車に6人で乗り込み、パドレは 後ろの席に座られました。私は前の 席に、もう一人と席を分け合いなが ら座っていました。オドン・モレス が運転しました。目的地まで、話 し、歌い、笑い、祈りました。パド レは私たちに、世界中でやるべき、 そして私たちを待っている数え切れ ないほどのオプス・デイの使徒職に ついて話されました。また、その少 し震えて抑揚のあるバリトンの声 で、愛についてのふつうの歌を、神 様のために向けながら歌って下さい ました。「♪ 私を喜びで満たしてく れる 一つの愛を持っている… | 冗談 もよく言われました。カーブを曲 がって、遠くに古いおんぼろの家が 見えると、「ほら、あれがモリノビ エホだ!」と言うのでした。それに何 度か引っかかり、がっかりしまし た。ああ、そういえば、私は車酔い で、吐いてしまいました。しかも父 の喪中で喪服を着ていたので、それ を汚してしまいました。パドレは汚 れをきれいにするのを手伝ってくだ さり、気にしないようにと慰めて下 さり、11月というのに窓を開けて 旅を続けるようにして下さいまし た。これほどいっぱいの愛情を注が れ、よく面倒をみてもらったので、 ただの「パドレ(父)」ではなく、 「パドラッソ(すごくやさしい父)| だと感じました。 (…)

- もう、あなたについて人物評が広まっているそうですね。厳しく、口うるさく、非情で、聖エスクリバーの懐で育てられた人物だと…?

- オプス・デイの「重み」を感じられましたか?
- オプス・デイの重みを感じましたが、同時に神様の力も感じました。オプス・テイは、好むと好まざるとにかかわらず、霊的に一枚岩です。すなわら「一つの心、一つの魂」です。私が誤らないように、全員が祈っています。そして、世界中のあ

らゆる場所のあらゆる人たちから、 何百通という手紙が届いています。

- 聖エスクリバーとデル・ポル ティーリョ師というオプス・デイの 二保護者が眠るここビラ・テベレの 地下に降りられるとき、ご自身のた めに何を祈られるのですか?
- 良き牧者であること。忠実で、全ての息子と娘のために自分を捧げ、子供たちとほんのわずかも離れることがないように、と祈ります。 (完)

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/opusudeinozhong-mitoshen-yang-noli/(2025/11/20)